

---

# 琥珀色の友人

川中流一

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

琥珀色の友人

### 【Nコード】

N4656M

### 【作者名】

川中流一

### 【あらすじ】

少しか暫く前、二人の男は出会った。

出会いは賭博、付き合いも賭博、生き様も賭博、お前に出会ったままの所為で俺は貴族にして賭博塗れの人生だ。手を出すと抜けられないってのは本当だな 全く、楽しくて仕方がないぜ。\*縦書読推奨

一・大負（前書き）

聞きたいか？どこから俺があいつに巻き込まれたのか。

## 一・大負

「雨四光、月花酒、猪鹿蝶、青赤丹」

おおお、と周囲がざわめく。札をそのままにその男は立ち上がった。

「こんなものか…つまらねえな」

「まさか光が負けるなんてえなあ。しかもあいつ、花札は今のが初めてらしいぞ。やり方もさつき一度見ただけだ」

「初心者相手に百連勝ならず、か。畜生、お前に賭けた金をどうしてくれる」

「まあ言ってやるな、初心に限ってまぐれで大勝することたあある」

「それに一番大負けしたのはこいつだぜ」

ぽん、と肩を叩かれて、茫然としていた意識の焦点が藍色の背中に向かう。

「待て！」

男が顔だけを半分振り返りこちらを見る。

「お前：見ない顔だな。名はなんだ」

「負け犬に名乗る名はねえよ」

ふ、と不敵に口元を上げてそいつは再び背を向ける。柄の悪い輩も何故か道を開けて、その中央を悠然とそいつは賭博場を出て行く。

「待てよ！」俺はそいつの肩を掴んだ　と確かにそう思ったが、思った時にはひっくり返って蜘蛛の巣のかかる裸天井を見上げていた。またもやおお、とざわめいている。

「なんだ今のは」

「触れたと思ったら突然勝手に体が飛んだぞ」

「あいつは歩くのを止めもしなかった」

「俺は一瞬見えたぜ　あれは合気道じゃないか。だとすると師範以上だ」

我も我もと観衆がその男の背を見ようとするが、しかし誰も近づこうとはせず人だかりは山になる。

「くそっ」

ぺ、と唾を吐き砂を払い、人山で見えなくなった先を睨みつけた。

なんだ、あいつは。

「光次郎、なんだその泥姿は。まさかお前、また掃き溜めに入りにしているんじゃないだろうな。誰か人に見られたらどうする気だ」

「俺には掃き溜めの方が肌が合うんだよ」

「ならばもうこの家を出て行け。弟の外聞が悪いと迷惑するのが私だと分かっているのか」

「あんたにそんな権限ないだろう、光一郎お兄様」

「私が家督を継いだらお前は勘当だ。私は母上のように甘くないからな」

「はいはい、頑張つて下さい。出世するといいですね」

「光次郎……！」

「ははん、兄貴が俺に素手で勝てるのか？ 幾ら落ちこぼれでも喧嘩の腕だけは負けたことないぜ」

今迄は。ち、と思いもう兄はどうでもよく脇を過ぎる。

「面汚しめ……」声を低めることもなく聞こえてきた。

月も星も無い朔の夜空を仰ぐ。

そうだ 黒く、黒く、深闇の瞳をした男だった、あいつは。

## 二・茶湯

「分かっているだろうな、今日だけは必ず粗相のないようにしているんだぞ。早川の家がどういう状態であるのか少しは考えるんだ」

「はい、そうですね。父君は御亡くなり残るは歴代積み重ねた名と借金、病に臥せた母君と遊び耽る愚弟、かつての名門早川も今は没落手前の虫の息、奔走するお兄様も当主として家督継ぎが認められるか否かの瀬戸際でございます」

「他人事のように言うな。この茶会に招かれるは一流貴族の証、私だってお前などを晒したくはないが揃つてと書かれていた。つまりは吟味されるのだ、早川が上流に相応しき名かどうか。御家の命運がかかっていると思え」

「大人しくしているよ、足の痺れの耐えがたきを耐え済まし顔を張り付け結構なお手前で、などと嘯いていればいいんだろう、実に簡単だ」

茶の作法なんて忘れたが、なに隣を真似れば大丈夫だろう、その前に昼寝でもしておこう。「どこへ行く」適当な部屋を拝借せん、声も無視して無駄に長い廊下に出た。

然して寝過ごし一応慌て茶室前で息整える。だが遅れたる事実よりもその対応が見られるのさ、さあいざ上品に仮面を被り参ろうかす、と襖を開けにじる。深く礼をし先ずは正客に詫び挨拶せんと面を上げる

「ああ、お前は！」

静かな時の流れていた茶室が止まる。驚き目を張りなんだあいつはと隣同士が目配せ囁き間がざわめく。しかし上座の黒い瞳の男だけは動じずというか気にもかけず、抹茶を啜りそして静かに茶器を置いた。

「結構な手前で」

静かに通る男の声にはつとしたようにぴたりとさわめきは止みまた時間が流れ始めた。

一方俺は存在を消されて茫然としかし軽い混乱に陥っていた。整理しよう、ここは上流のみの茶室、あそこは不逞な輩の集う賭博場、あの男は正客つまり上流中の上流、外に出ると言えば他人の屋敷が庭園のこと、独り歩きなどしたこともない筈　で、あれはつまり違う人物か。いや俺の目を侮るなよ！その品性垂れ流しのむかつく空気を読み違える筈がない！

「亭主、客人に茶を点ててくれ」

男が言い再び俺の存在が浮き出される。幾つも目が向く。客人？するとまさかあれが

「早川光次郎殿だ。初に目にかかるが兄君によく似ていられる。どうぞ席に、」

男に促された視線の先、末席には蒼白の兄がいた。

「も、も申し訳ございません、霧崎様。我が愚弟はこういった席に不慣れで、いえ全て私めの不届きでございますが、」

「おい、初目とは心外だな、すかした顔をしやがって」

息を呑む、息を呑む。兄ならずともしいんと可笑しな程蒼白の顔が並び恐る恐る視線が上の席に移動する。

「これは失礼をした。どこかで擦れ違いをしていたとは」

「違うだろ、いいのかここで言っても」

「と背後から口を押さえられた。」

「申し訳ございません、申し訳ございません、弟は父の亡くなってからというもの少し頭をやってしまい、まだ家中で療養すべきところを大変な無礼を致しました。これのこともありますので茶の途中で罷ることどうかお許しくださいませ」

ひれ伏して兄が言う。だから老けるんだな、同情するぜ。

「光太郎殿のこと、真に惜しい。心深き誠実な方で父も懇意にして頂いた。またの折りにお話など伺い悼ませて頂きたい」

ははあ、と兄はただただ平伏して、立ち上がると俺を火事場の馬鹿力とも言える力ですぐそばのにじり口の奥へと押し込む。俺も頑として此処にいたい訳でもないので罷ってやることにした。

皆同情やら安堵やら嫌悪やらこもこも表情を浮かべていたが、あの男だけは一人涼しい顔をしていた。

だが俺は見たんだ、その優雅な口元が薄らと上がっているのを。



### 三・夜街

謹慎なんぞ知るか、と夜街に繰り出す。向かう先は例の賭博場。全くあいつのせいだ、あいつのせいで全てが台無しだ。今宵は憂さ晴らしという純粹なる目的で心の底から遊んでやろう。

「よう」

見間違いだろうか、元凶の男がその路地の口にいた。

「他の遊びを教えろよ」

恐らくこの男の基準で言えば朗らかと言えなくもない調子で話しかけているのはこの俺だろうか。

「やなこった。誰だよ、お前？」

一体どういふつもりだ。少しばかりのお返しに知らない振りを返してやる。

「この前ここで会っただろう。物覚えの悪い男だ」

くすくすと男は笑う。その物言いに何か違和感を感じた。

「ここで？茶室の間違いだろう、存分に無視してくれやがって」

「茶室……？」

男は一寸笑みを止め怪訝な顔をした。

「何のことだ」

「しらばつくれるなよ、お前のせいで俺は謹慎中だ」

「言い掛かり甚だしいな、一体何故俺のせいなんだ。大体見たところ謹慎しているとは思えねえが」

「煩い、煩い、全てお前のせいなんだ。人の縄張りを荒らしやがって」

「ああ、すまねえな。確かに面目を潰しちまった。手加減の仕方の少々難しい遊びだ」

「てめえは本当にむかつくな、それは嫌みか地なのか」

「地で嫌みだ」

男は可笑しそうに笑った。だから違和感を感じる。こいつは本当にあの茶室にいた男か？雰囲気も喋り方も表情もまるで違う。物は試しだ。

「お前、双子の兄がいたりしないか」

「へえ、よく分かったな？俺の兄を知っているのか」

男は一寸驚いた顔をして、面白そうに俺を見た。改めて見ると全然違う気もする。あの上品な能面顔からはこう人を小馬鹿にした笑みを想像できない。

「お前、名は？」

「霧崎千次、通りすがりの遊び人だ」

「早川光次郎、泣く子も笑う遊び人だ」

ふ、と男は笑って名乗り、俺も格好をつけて同じように慇懃に笑い返した。

「なんだなんだ、違うなら違うと早く言えよ。それならば話は別だ、この早川光次郎、勝負事に恨みをつけるような男じゃあないぜ。お坊ちゃんに夜の火遊びというものを教えて進ぜよう」

俺達は夜を歩き出す。なんだか連れというのもいいものだ。

「そうかそうか、お前も次の字か。大変そうだよなあ、分かるぜ、優秀な兄を持つ弟ってのはくれるものだ。次なんて名を与えられて生まれた時から何においても兄の二番煎じ、俺なんか『次に光る』男だ。やってられるか、見てろよ俺はそんなに小さく収まる器じゃあないぜ」

「よく喋る男だ」男はくすくすと微笑んでいた。

「よおし、今日は機嫌がいいぞ。いけない火遊びを教えてやろう、ついてこい」

行く先女郎屋、だが馴染の見世の前ではたと立ち止った。

「お前、金を持っているか」

「いや」

男は手を広げて見せた。人のことを言えたものじゃないが手ぶらで

遊街をぶらつく風流人がいるものか、常識知らずはやはり貴族の坊ちゃんだ。

「仕方ない、戻ってひと稼ぎしてからにしよう」

俺は半歩返したが男はのれんをくぐっていた。

「おい、」

「付けねばいいだろう」

当然のようにそう笑った。俺は呆気にとられずにいらなかった。なんだなんだこの遊び慣れた風は。俺以外にもこんな不逞な貴人がいたとは。しかも没落手前どころか天下の霧崎の御子息様じゃないか。

そしてこいつは異様にもてた。俺が暖簾くぐれば女はきやあきやあ騒ぐものだが今宵女がしなをつくって困っているのは俺ではない。畜生、俺としたことがちよつとした計り違いだ。

おまけに四半刻経たずに「出る」と外に連れ出され「どうだ」と余裕を見せて聞いてやれば「出来合いのものはつまらねえな」とかよく分からないことを抜かしやがる。

とにかく俺達はこの夜から連れ立って街を徘徊するようになった。一人は名門、一人は没落手前の貴族にして共通するは次男坊の色男、賭けも喧嘩も女も二人揃えば天下に敵無し、さあさあ今宵も我らが世界を闊歩謳歌しようじゃないか！

#### 四・勘当

俺は男と女の絡み深く口づけ合うのを見た。女は俺の女で男は俺の友だ。

「てめえ！」

怒鳴り声に気付いて男は女を離してこちらを見た。

「早川殿か。このようなところを見られてお恥ずかしい。しかし一体どうしてそのような剣幕をされる」

「違った、友の兄だ。全く紛らわしい。」

「そいつは俺の女だ」

「ほお、早川殿の？しかし彼女は以前より私を好いていたということだが」

女が気まずそうな顔をする。

「あの男が勝手に思い違いをしているのでございます。確かに迫られはしましたが私ははっきりと申しました、私の心は霧崎様のものと。この想いに気付いて頂けましたのが貴方様を一途に慕う心の証でございます」

俺はもう、怒り通り越して呆れていた。別段この女になんの未練もないし責めもない。ただ互いに都合よく体を利用していただけだ。

「しかしそうと知っては最早貴女と逢うことはできない。早川殿は父の代より懇意にして頂いている大事な友人なのだ」

「そんな、霧崎様……！」

「おい、」

こんな茶番に付き合っついていられるか。

「俺の名は早川光次郎、親父とは一字違いだが完全別人物だ。てめえと友人になった覚えはねえし今後なるつもりもねえ。その尻軽女にはなんの未練も糞もねえが人の女に手を出したけじめはつけさせてもらうぜ」

俺はそう言っただけでかかと男に近づき、と胸倉を掴んだ。きや

あ、と女は悲鳴を上げるがそれ程恐怖の表情をしてはいない。むしろ不可解にも少し頬は緩んでる。

「お止め下さい、私を争って喧嘩など」

「てめえは黙ってる、二度と男に媚びれない顔にされなくなかったらな」

じろりと睨むとやつと女は竦んだように口を噤む。今度は端正極まりないすかした能面面を睨みつけた。

「やけに大人しいな、俺に殴られる前に何か言って置くことはねえか」

「貴殿と争う故はない。知らずとは言えこちらに非があるようだ。気の済むようにして構わない」

「腹の立つ程結構な心意気だ。敬意を表して手加減無しでいかせてもらうぜ！」

俺は思い切り振りかぶり男の面を殴り飛ばした。今度こそ本当にきやあああ、と悲鳴が上がる。男は壁にどんと背を打つ。

「はっ、ひよろっちな。あいつとは大違いだ」

悲鳴を聞きつけたのか遠くからどたどたと人の走る音がする。

悪いな、兄貴。出来の悪い弟で。だが例え早川の瀬が流れを止めようと俺の歩む道に悔という文字は無い。貴族の名は捨てても男の名は捨てられねえよ。

「光次郎：お前は勘当だ。二度と早川の名を名乗るな」

「お元気で、母上」

「次郎、兄上にも挨拶をするのですよ」

「俺の顔なんぞ見たくもないだろう。きつとやつと追い出せてせいせいしているさ」

「何を言うのです、お前は事の大きさを分かっていない。此度の事、謹慎程度では済まされません。このままでは適当な文句をつけて自害せよとの達しが朝庭より来るでしょう。その前に縁を絶ち命だけでも逃がしたいとの兄の心です」

「そんな大袈裟な。第一それが本当なら俺がいなければますます家が危ういということじゃないか。あのお家大事の兄貴のすることじゃない」

「無論そんなことをしてしらを切れば早川の取り潰しはほぼ確実。しかし兄は家よりもたった一人の弟の命を取ったのです。私はそれこそ早川当主の名に相応しき行いと信じます。きつと父君もそう為さったことでしょう」

「……でも、会っていかねえよ。会っていかねえ。余計どんな顔すればいいか分からねえよ」

「光次郎……達者にするのですよ」

さて、どうしようか。家無き金無き名字無き、取りあえず金でも稼ぎに行くか。

あいつは、いるかな。どんな顔をして俺を笑うだろう。俺は今日もてめえのせいだとあらぬ因縁をつけて詰ってやろう。

## 五・喧嘩

茜差す刻まだあいつはいなく、俺は賭博場で独り勝ちを続けていた。今日は調子がいい。いや、元々あいつさえいなければ俺に敵無しなんだ。だが勝てども勝てども、

「つまらねえ」

なんてことだ、あいつの口癖が移っちまった。さつさと来いよ、畜生。

落日夜来りていつものようにあいつは姿を現した。

「よう、光次郎。今晚は早いな」

勝ちに勝った金の山を見て友は相変らずの笑みを浮かべて言った。

「勘当されたんだよ、今日から俺は宿無しだ。宿無光次郎、中々いい響きじゃないか。彼は伝説の賭博師となって夜街に語り継がれるだろう」

「勘当される奴なんて初めて見たぜ。一体何をやらかしたんだ？」  
くすくす笑ってそいつは言う。何も知らずきつと冗談とも思っているんだろう。

「お前の兄貴に女を盗られたから、殴ってやったんだよ。思い切りな」

「ああ、随分思い切ってやったよな」

「なんだ、見てたのかよ」

笑いながらも俺はふと男の頬に白布の貼ってあることに意識を留めた。  
丁度、そんな位置だった。

「お前、それ…どうした？」

ああ、これかと言って男は右頬のそれをぺりと取った。

「奇遇だな、殴られたんだよ女を寝盗ったら この顔じゃ今夜はお前の方に女が寄るかもな？」

痛々しい拳大の青痣を頬にそいつはくすくす笑って言う。

「お前：お前：まさか、名はなんだ？」

そいつはにやりと笑って言う。

「霧崎千次 名門霧崎家の一人息子だ」

「千次、悪い冗談はよせ。お前の兄貴はなんて名だ」

「兄なんかいねえよ。俺の『次』は霧崎千年に次ぎ先千年へ次ぐ男の意、てめえのような二番煎じの次ぐとは重みも意味も訳が違うんだよ」

俺は男の衿ぐらを掴んだ。しかしそれは縋るように。

「嘘だろう、千次。今なら冗談と上等の酒一升で許してやる」

「愉しくて仕方がなかったぜ、光次郎。普通同じ顔の奴を双子だなんて納得するか？そんなお人好しじゃどの道あの世界では潰れていただろう お前の親父のようにな」

「てめえ……！」

俺はぶんとその青黒くなった痣に拳を叩きこんだ、がひよいといとも簡単に身を躲され逆に体勢を崩す。

「散々楽しませてくれた礼はもう払ったぜ。親父にも殴られたことないのに、な」

とん、と俺の肩を支えてくすくすと男は笑う。

「お前が俺に勝てる訳ないだろう？光次郎、早川家の道楽息子が」

「千次：！お前、何でだ！？」

俺はば、と離れて正面のあいつの顔を見る。あいつは普通に会話をするような調子で答えた。

「何で、て暇つぶしだよ。強いて言うなら少しばかり気に食わなかったかもな、お前が」

「俺の何が気に食わないって言うんだよ！お前は全てを持っているだろう」

「甘いんだよ、甘ったりいんだ、お前は。お前が馬鹿にするような



奴等やお前の兄が好き好んで若造にへつらい頭を下げていていると思うか？何故つまらねえ茶会をやって上っ面で会話し意味もないしきたりに従うかお前に分かるか？」

「知るかよ！そんなの。嫌ならしなきゃいいだろう！」

「貴族だからだよ」

初めて男の笑っていない顔を見た。だからと言って怒った表情でもないがやけに凄みがあり思わず声が出なかった。

「お前は貴族に生まれた身を受け入れも抗いもせずただただ楽に流れている。それもいい。自由にしたきゃすればいい。お前には優秀な兄もいるしな、家族を守らなくてもいいだろう。但し貴族じゃねえ」

男はまた口端を上げて笑う。

「良かったじゃねえか、もう誰もお前を詰ることもため息吐かれることもない。好き勝手に生きればいい。守られることも守ることもない、自由気ままな平民として」

「一つ聞こう。あいつが俺の女だと知って近づいたのか」

「当然だろう？でなければ何故あんな女を。全くお前の趣味の悪さには辟易するぜ、まあお前程度じゃあれが限度なのかもしれねえが俺に女遊びを教えるなんて一千年早かったな、光次郎？」

「畜生！」俺はまた殴りかかるがぱしりと軽々しく拳は受け止められる。

「勝てねえよ。どれだけお前が喧嘩をしてきたって言うんだ？お前は逃げてきただけさ」

拳を流されて俺は前につんのめって膝をつく。

「ちなみに女だけじゃねえ。賭博場、茶会、夜街　偶然なんか一つもねえ、初めっから俺の意図通りなんだよ。　お前はきゃんきやん意気がる負け犬だ」

黒い黒い瞳で俺を見下ろして、そいつは歪んだ笑みを口に浮かべていた。

「はっ」

俺は笑ってぱん、と砂を払い立ち上がった。

「つまるところ、お前は羨ましかったんだろう、自由な俺が」

「いいや？確かに完璧な男もつまらねえが甘ったれた根性の男よりは大きい」

「完璧？お前のその歪んだ性格がか」

「そうは言わねえ、人格に上下などないだろう。『霧崎千次』という名のこの体のことだよ。完璧な能力、外見、家柄を備えた貴い器だ」

「残念だがお前は完璧じゃねえぜ。前はそうだったかもしれないが今は違う」

「ほお？何が完璧じゃないか言ってみろよ。悪いが負け犬の戯言にしか聞こえねえ」

「俺に喧嘩で勝てたら教えてやろう、『霧崎千次』」

俺はぱきりと拳を鳴らして悠然堂々と言い放ち、そして莞爾と笑った。

## 六・大勝

「こないならこっちから行くぜ」

構えない男に向かつて拳をしゅ、と打つ真似をする。

「お前のように何かと直ぐに拳で訴える低い品性は持ち合わせていない」

男は少しため息を吐いて困ったような顔をした。

「第一結果の見た勝負と弱い者苛めは余り好きじゃねえんだがな。お前を墮とすという目的ももう果した」

「墮とす？誰がどこから墮ちたって？この光次郎、早川だろうと宿無だろうと男を墮ちたことは無い。半歩譲ってお前がほぼ完璧に近い人間だとしても、男としてどうかと言うと微妙なところだ。しかし案ずるな、これは男児外に出て後天的に身に着くものだ。手っ取り早く教えてやるよ！」

俺は男に向かつて唾を吐き、黒い眼に向かつて両手に掴んだ砂砂利をばつと投げる。その上すぐさま手当たり次第にそこの物を投げつけた。酒びんを割って投げつけ灯りの火まで投げつける。止めに長い木棒で思い切り突いた。その間僅か三秒の早業。

「はっはっ、武道と喧嘩は間合いもやり方も大分違うだろ。投げられた物の対処は習っていなかったか？早手もとい疾風の光次郎とは俺のことだ」

高らかに笑い棒を引く　　が抜けず、代わりにぼきりと木棒の折れる嫌な音がした。

「…何が男だ」

相当低い声が聞こえた。燃える黒い羽織が投げ捨てられる。

恐らく状況的に酷く不味い気がする。直感だ、俺は一時的な撤退もとい勝ち逃げを試みくると方向転換して足に力を込めた　　が、ひゅ、と音が首筋を掠め、例の木の棒が目の先の土壁に突き刺さり

ばらばらと壁に亀裂が入るのを見た。

「　　気が変わった。相手をしてやろう、『宿無光次郎』」

砂埃が晴れ、男が額から血を垂らして口元を上げたのを見た。片や俺の方は額から冷や汗が垂れた。

「　　安い挑発に乗るもんじゃないぜ、千次君」

「だがここで引くのは観衆が許さないだろう、俺がやらなきゃお前は袋叩きに遭いそうだ」

周りを見ると酷い有様だった。物は壊れ散乱し火が燃え移りとはつちりを食らったのか体をさすっている者もいる。一瞬にしてこの惨状とは流石は俺だ。賭博場に賭博している者はなく皆立ってこちらを睨んだり面白そうな顔をしたりしている。幸か不幸か、人の喧嘩を面白がる奴の方が大多数だった。もっとやれやれと叫びなんと俺達の勝敗に賭けが始まった。

「黒の男だな」

「いや、光は曲りなりにも喧嘩で負けたことはねえぞ」

「あいつは機の読みが妙に巧いからな。相手と乗り退きを誤らねえ」

「だが悪名勝ち逃げの光だ、連勝百戦目も相手が初心と知って受けたんじゃねえか？」

「あいつが負けた時、正直ざまあみろと思ったよな」

「どうやら少しばかりお仕置きが望まれているみたいだな、光次郎？」

男はくすりと笑うとぽきりと拳を鳴らせた。

「待て」

「待たねえよ」

「いや、違う。折角だ、俺も賭けに参加したい。俺の金を俺に賭けてくる」

俺の男気溢れる言葉に観衆がざわめく。

「おい、光次郎は自分に賭けるみたいだぞ。何か奥の手が有るんじ

やねえのか」

「あいつは賭け間違えたことはないぞ」

「よし、俺は光に賭ける」

「俺もだ。光の卑怯手を信じよう」

男は面白そうに笑った。

「行つてこい。だが卑怯な手がそう何度も俺に通じると思うなよ」

「正々堂々勝負してやるよ」

俺は不敵に笑い返す。

そして稼ぎに稼いだ金全てを賭けて

「さあいつでもいいぜ。勝負の仕方つてのを教えてやる　　かかつてこいよ！」

不敵に笑う男二人は拳を向けて向き合った。

結果はどうなったかつて？そんなの当然だろう。

「俺の勝ちだ」俺は天井を仰いで高らかに笑った。

「何を言ってるんだ、お前は。寝言は　寝て言ってるな」

床に仰向けごふ、と血を吐いた俺を男はやれやれとため息を吐いて担いだ。

「待て、金を受け取るから降ろせ」

「お前は殺されるまで自分の負けを認めねえのか？後味は悪いがお前の死を揉み消すこともできるぜ」

「勝ちだよ、俺の」くつくと俺は笑いを溢す。

「自分に賭けたのさ 自分の負けにな」

一瞬止まって、それから男は笑いだした。ははは、と実に愉快そうに笑う。

「成程な。面白い男だ、お前は」

「だが喧嘩に勝ったのは俺だ。俺が完璧でないと嘯いたのは訂正してもらおうか」

「訂正するものか」

「どこまでも往生際の悪い男だ」

「お前は完璧ではない。何故なら俺という完璧でない友人を持ってしまったからだ」

はたと止まって男の黒い眼は俺を探る。

「…お前、まだ俺を友達だと思っているのか。お人好し通越して最早ただの馬鹿だな、お前は」

「男は一度吐いた言葉を訂正しないのさ、例え裏切られてもな」

「あのなあ、お前に友達でないと言われた覚えはあるが友達だと言われた覚えはないぜ」

「友達だ」

俺は言った。

「ほら、聞いちまったな？訂正しねえよ、ばーか」

高らかに朗らかに、勝利の笑い声が小狭い賭博場に響いた。

## 七・琥珀

肩を担がれて俺達はすっかりとつぷり真夜中の空気に出る。

「なあ千次、俺と友達になるとは思っていなかっただろう？覚えておけよ、意図と女は裏切るもんなんだ」

「思ったことはねえし今も認めてねえよ」

「だがお前はこれで糞つまらない完璧な男を脱せられるんだぜ？」

「…そうだな、お前は面白い　考えておこう」

「照れてるな？お前、少し可愛く見えてきたぞ」

男が俺の肩から手を外したせいで、そいつにずたばろにされた俺の体は裸路地の上にどさりとまた仰向けになった。

「自分で歩いて帰れ」

「どこにだ？お前ん家、泊めてくれるのか」

「断る。自分の家に帰れ」

「宿無だつて言っただろう」

「早川は潰さない。勝手に勘違いをして社会に屑を放りだすな、とお前の兄に言っておけ」

「屑とは酷いな、俺は俺で借金を返そうと卑怯の汚名を被ってまで奔走したんだぞ。あの兄貴は、というか貴族つてのは見栄張りのくせに金策を考えようとしなからな」

「だからって賭博に手を出すことはないだろう」

「もうあの賭博場には戻れなさそうだなあ。俺の居場所だったのに」

「お前、大概に最低だからな。当分あの界限には寄れないだろう」

「まあいいか、一世一代の大勝負で得たあの金で御家の借金も返せる。喧嘩に負けて勝負に勝つとはこのことだ」

「そう言つと聞こえはいいが、自分の負けに賭けるなんて情けなさ過ぎて普通できねえよ」

「男は恥を忍んでも大局を見据え成し遂げねばならないことがあるんだ。終わり良ければ全て良し、俺も手段は選ばない」

「お前はもう男を騙るな。そして『も』てなんだ、万が一にも俺とは一緒にするなよ」  
構わず俺は続ける。

「それにお前がいるなら少しは貴族社会も面白くなるだろう。けどお前、あの喋り方と顔は辞めるよ。はつきり言っただけで気持ち悪いぜ」  
「うるせえ。だが確かに俺を見てると馬鹿らしくなってくる」

「その調子だ。よし千次、今日は俺ん家に泊めてやってもいいぜ」  
「どの口が言っている。本当に限りなく調子に乗る男だな」  
「そっぴや何で喧嘩したんだっけ、俺達？」

「忘れたな」

俺ははは、と笑う。

「そうだろう、拳で語り合えばすっきりするだろう」

「一体いつお前が拳を使ったのか甚だ疑問だが一々正すのも面倒だ」

「お、」

「は？」

「流れ星だ」

「だからなんだ」

「だからお前はつまらない男なんだよ」

「なんだと？つまらないのは俺であつて俺はつまらなくねえ」

「はいはい、意味分からねえよ、言いたいことは分かるがな」

「てめえ」

誰もいない夜の路地で俺は仰向けになって、男は俺の傍に立っている。真っ暗闇の空にやっぱり月は出ていないが、晴れの夜空には琥珀色の星屑が輝いていた。

「なあ千次」

「なんだよ」

感謝しろよ、俺程の男が



「お前の次になら、光ってやってもいいぜ」

お前の暗空の星灯りになってやろう。

完

## 【後書】

「　　という慣れ初めだ。酷い男だろう？」

「どつちもどつちやな」

「旦那様は悪くないと思います。御友人様は物を投げるのは酷いです」

「確かにその部分はどうかと思うで」

「二人とも酷だなあ。ちよまで俺の味方をしてくれないのか」

「うん、まあ御主人も全体的に見て格好良かったかもしれん。結局御主人が変えたってことやろ、少しばかり」

「そうそう、流石ちよだ。ここだけの話な、ちよは千代の千繋がりであつて置けないのも手伝つて貰　えーと、譲り受けたんだ」

「ええええ。それは言わなくて良かった。ちよつと微妙な気分やわ、それ。御主人どれだけあの人のこと好きなんや」

「けれどちよは旦那様と全く関係がありません」

「妬くなよ、瑠璃ちゃん。というかなんだ？今俺は叩かれているのか」

「旦那様に物を投げた分です」

「可愛いなあ、羨ましい奴だぜ、本当」

「御主人にはウチがいるやん」

「はは、両手に花だな」

「おい、光次郎！お前一寸目を離れた隙になに瑠璃に手を出してやがる」

「叩いているのです、旦那様」

「俺だつて瑠璃には叩かれたことないぜ」

「どういつ妬き方だ、それは。お前はそういう趣味か。てつきり逆だと思つていたが本当に変わったな」

「なんの話だ」

「ちょっとした昔話だよ、な？瑠璃ちゃん」

「はい、御友人様」

「おい瑠璃、もう行くぞ　帰ったら消毒してやる」

「なんだ人を病原菌のように。寂しいなあ、女が出来た途端に離れやがって」

見送る二つの背姿は黒と銀　彼は微かに微笑んだ。

「まあ、月灯りには霞んじまうか」

了

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4656m/>

---

琥珀色の友人

2011年8月6日22時34分発行